

「近代の功罪」の切り分けは可能なのか？－〈脱近代〉の思想構築に向けて－

〈持続可能な共同性〉とその倫理 — 〈両面的乗り越え論〉の原理的検討から—

増田敬祐（東京農工大学 非常勤講師）

発表全体の流れ

）「近代」の問題、及び、現代日本の問題とは何か

→ばらばらに分断された個人の孤立無縁化と少子高齢社会（社会環境の問題）

→ローカルな空間の衰退による地域資源の荒廃（自然環境の問題）

→「環境」の問題

→〈脱近代〉の思想構築の必要

）打開策として注目される地域社会（ローカル・コミュニティ）への期待

→自然と人間の関わり、人間と人間の関わり回復の場としてその重要性が共有される

）新しいコミュニティの創造

→「個人主義」と「共同体主義」への批判から新たなコミュニティを創造する必要

→人間と人間の関わり＝「共同（きょうどう）」性の醸成が改めて問われている

→報告者はこのような議論を〈両面的乗り越え論〉と名付けた（増田 2011）

本報告の論点

）〈両面的乗り越え論〉における「共同（きょうどう）」性について、その〈共同の動機〉を問題とし検討する

一つに、〈両面的乗り越え論〉における〈共同の動機〉の脆弱性について

一つに、〈両面的乗り越え論〉における〈共同の動機〉の発現可能性について

）〈持続可能な共同性〉とそれを担い得る人間存在の把握の方法論の展開の必要性

本報告における「共同（きょうどう）」について

「共同（きょうどう）」には呼び名は同じ“きょうどう”でも構成する中身が異なる多様な“きょうどう”がある。協同、協働、共同、共働などである。本報告における「共同（きょうどう）」の整理は以下である

「共同（きょうどう）」の原理と形態がアソシエーションをとる

→協同、協働、共働

「共同（きょうどう）」の原理と形態がアソシエーションをとらない

→共同（自治的共同）

→生命的生存基盤（サブシステム）のための〈人間の共同〉のこと

「地域社会」の多様な「共同(きょうどう)」の根幹をなす〈人間の共同〉こそが、生命的生存基盤（サブシステム）を内包する自治的共同である

はじめに

本報告では、現代日本で深刻となっていく孤立無縁の社会にあつて、少子高齢化が進行し、これまで自明の前提とされてきた人間存在の存続それ自体が自然の理ではなくなっている時代を問題とする。ゆえにそのような時代に「存在する」とはどういうことなのかを改めて問うことを根柢におく。「存在する」を問うことは、その存在の「環境」を問うことでもあり、現今の「環境」の問題において大きな論点となっているのは、自分たちの身近な環境の問題である。それは自然と人間の関わりに留まらず、人間と人間の関わりのあり方をも問い直す。特に孤立無縁化する人間存在の問題は喫緊の社会問題となりつつあり、人間と人間の関わりの回復や再生が求められ、その延長に「地域社会」やコミュニティの回復が多方面でキーワードとして唱えられている。本報告では以上を踏まえ、「地域社会」という生存や存在の基盤となる空間における人間と人間の関わりのあり方を〈人間の共同〉とその〈動機〉に焦点を当て検討していくものである。

現代日本の「共同(きょうどう)」の形態は良くも悪くもアソシエーションに収斂している。アソシエーションは「地域社会」再生の議論においても注目され、それを理論的に支えるのは市民社会概念である(2011 増田)。つまり、現代日本における人間と人間の関わりのあり方は、市民社会(Zivilgesellschaft)を基礎としたアソシエーションの構築を論点としており、喫緊の課題であるコミュニティ回復のための「共同(きょうどう)」性についても原理的にはこのアソシエーションをモデルとする。アソシエーションについてより具体的には「共同性」と「個別性」の連関が問題となっており、そこにおいて共通理解となっているのは以下のような論点である。

「近代社会は、一方で、それまで個人が保持していた共同性を喪失させたことは事実である。しかしそれはメダルの一面にすぎない。その共同性喪失の裏面では、それまで何らかの共同体性に埋没し従属していた個人が自立化し個別化したことも事実である。したがって近代を超克することとは、何らかの共同体性へ回帰することではなく、個人の自立を保持しながら共同性を回復することに求めなければならない(強調点は引用のまま)」。(元田 2007

p.169)

本報告では、上記のように個人の自立を前提としながら「共同性」を回復させようとするアソシエーションの契機や原理の抱える課題について検討を行う。なぜなら、「共同性」回復のために自明とされるアソシエーションだが、現実には理念としてのアソシエーションと現場のアソシエーションで実現可能性の点において乖離が生じているからである。しかし、「共同（きょうどう）」の議論でアソシエーションそれ自体を問題とする議論はまだ少ない。多くは市民社会の成熟を達成することとアソシエーションの発現を同義と考え、アソシエーションを現実根付かせるための契機や原理については考察していない。本報告では、“関わり”や“つながり”の重要性をアソシエーションに託して提唱するだけではもはや「地域社会」としてのコミュニティの問題は解決できず、またその実現可能性を問うことから「共同（きょうどう）」の一形態としてのアソシエーションの問題点を指摘する。そして「地域社会」における人間と人間の関わり方方には〈持続可能な共同性〉というものの考え方が必要であり、またこの〈持続可能な共同性〉を担い合うための人間存在の把握の方法が求められることを提起したい。

1 両面的乗り越え論という呼び名

前出の元田厚生の『個人主義と共同体主義の両面的乗り越え』における「両面的乗り越え」に代表される「共同性」の議論で「個人の自立を保持しながら共同性を回復すること」を重視する論調を報告者は〈両面的乗り越え論〉と名付けた（増田 2011）。ここでの「個人の自立」とは、個人の「自由」と「権利」の保障、現実的には個人の活動に自由選択を担保することで内面的自発性により発現する「自立」を意味する。この場合、「自由」とは単なる利己主義や個人主義のそれではなく、他者との「共同性」を内包した「連帯する者たちの自由」であると解されている。〈両面的乗り越え論〉はコミュニティ論においても同様に提唱される。次により具体的に「地域社会」の次元で〈両面的乗り越え論〉を展開している広井良典の「新しいコミュニティ論」を検討する。

2 広井良典のコミュニティ論

コミュニティ再生のために「伝統的共同体」の「共同性」に注目する議論に、広井良典の「新しいコミュニティ論」がある。広井は現代の日本社会が抱えている問題を、「古い共同体が崩れ、しかしそれに代わる『新しいコミュニティ』ができておらず、個人がばらばらで孤立した状況」にあると捉える。その克服には、「個人をベースとする公共意識」（独立した個人としてつながる）を基礎とした「都市型コミュニティ」と、その

ような都市と不可分な関係にある「市民citizen」を前提としながらも、都市の抱える「社会的孤立」などの問題から、そこに「共同体的な一体意識」（同心円を広げてつながる）を担保する伝統的な「農村型コミュニティ」を「融合」させる「新しいコミュニティ」が必要であるという（広井 2006、2009）。換言すれば、広井は「地域社会」において「都市型コミュニティ」＝市民社会と「農村型コミュニティ」＝「伝統的共同体」を「融合」させることで新たな地域再生のためのコミュニティを提唱しているのである。それは、個人が「共同体」に埋没することを防ぐために「独立した個人」を担保しながらも、その一方で個人がばらばらに孤立し、「地域社会」が瓦解していくことを回避するために、地域の「伝統的共同体」の積極面である持続的な「共同性」を組み込むという、両者の「融合」を目指したものである。このようなコミュニティ論を、本報告では「伝統的共同体主義」と「近代的個人主義」の両面の弱点を乗り越えるという意味で、〈両面的乗り越え論〉と呼ぶ。

しかし、本報告はこの「融合」の実現可能性に原理的な部分で矛盾があるのではないかと疑問をもつ。広井は「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」の「融合」のバランスが重要だと述べるが、両者の出自をたどれば大塚久雄の図式に典型的なように「伝統的共同体」を否定したところに「自立（独立）した個人」を担い手とする市民社会を想定した。従って広井のような大塚の二項対立図式の延長に「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」の「融合」を設定するのであれば、この二項対立の矛盾を克服する理論的な説明が求められる。だが、広井ではそれがなされていない。

問題は、これまで「伝統的共同体」対「自立した個人」として対立的に論じられてきた地域の「共同体」と市民社会を「融合」すること、言い換えれば、〈両面的乗り越え論〉による「融合」がいかにして可能となるのかである。それは多くの場合、マルクスの定義したアソシエーションの原理と形態に則ったものとして論じられている。

3 〈両面的乗り越え論〉の原理と形態

田畑稔によれば、マルクスのアソシエーションはルソーの『社会契約論』にある政治体である「アソシアシオンの一形態」から影響を受けているという。そのうえで『ドイツ・イデオロギー』において「諸個人の連合化(Vereinigung)」として、「個人性の本格的展開」と「共同社会性の自覚的組織化」という二つの要請を実践的に総合する形態を提示した。これはマッキンタイアが『美德なき時代』で提示した近代の相反する二つの概念にどう折り合いをつけるのかという近代の問題点、つまり本報告における〈両面的乗り越え論〉が原理的に内蔵している「伝統的共同体主義」と「近代的個人主義」の「融合」は実現可能なのかという問題と同様のものがある。

マルクスはそれを「私的所有」原理にもとづくブルジョア的市民社会そのものの止揚によって考えた。そこでの〈共同の動機〉は「生産と交通」による「自己変革」や「類的存在」という概念によって説明されている。しかし、〈共同の動機〉の視点から本報告ではこのアソシエーションの原理と形態には以下の問題があると考え。一つは、アソシエーションにおける〈共同の動機〉の脆弱性について。もう一つは、〈共同の動機〉がアソシエーションの担い手の間でどうやって発現するのか、その発現可能性についてである。ブルジョア的市民社会を超えたところに想定される連帯（アソシエーションの発現）だが、この連帯を実現するために求められる〈共同の動機〉とはどのように説明されているのか。それは上記のように「生産と交通」の関わりから生じる「自己変革」などの「自立した個人」の「気づき」に託されるものである。しかし、人間生活の根本までが近代社会のシステムに依存している時代にあって「相互にアソシエイトしあう」ための「共同性」の共有や了解が現実には達成されるには「自立した個人」の「気づき」を原理とするだけでは脆弱性を免れ得ない。「近代の問題とは何か」についてその意識を共有するマッキンタイアが、「他者との自由な連帯の中にどう入っていくのかマルクスは語っていない」というように、同じく〈共同の動機〉をアソシエーションに依拠する〈両面的乗り越え論〉の論者はそれをどう説明するのか、現代のように存在の基盤の自明性が揺らぐ時代において人間存在論として問われている。

以上、アソシエーションにおける〈共同の動機〉の問題群について、ニュータウンやマンションにおける居住区の「共同性」に注目した竹井隆人の集合住宅型共同モデルを例にみしてみる。このモデルからアソシエーションでは“参加の度合い”で既に「共同性」が破綻していることが分かるからである。竹井は、マンションの住居者同士の関わりは、建物竣工後から五年経過ぐらいまでは高位で推移するものの、その後、一気に低下していくことでは共通し、親睦会などへの参加をみても、それは、経年とともに減少し、世帯同士の顔見知り度合いの低下、つきあいの範囲の縮小が年々深刻化していくことでは総じて一致するという。このことは「自立した個人」の「自由」選択による居住区の「共同（きょうどう）」では持続的な「共同性」が担保されず、また居住区における共通認識も、年々、醸成できなくなっていることを示している。また本報告の視点からすれば、現代日本の居住区の管理は、住民がそのほとんどを業者のサービスに委託することを選択し、住民間の「共同性」それ自体から生じる負担や束縛をなるべく減らそうとする方向にある。つまり、自分たちの生活空間である居住区の「共同性」であってもアソシエーションに依拠する〈共同の動機〉は発現しにくくなっている。まとめると、アソシエーションの〈共同の動機〉は「共同（きょうどう）」の脆弱性と、そもそもの〈共同の動機〉の発現可能性が発現不可能性を帯びるようになってきているのである。

しかし、このような居住区の「共同性」の喪失が現実の問題として前面に表出するこ

とはあまりない。なぜなら、現代では生活空間ですらも財とサービスに依存することで成り立っているからである。皮肉にもこの財とサービスへの依存を続けている限り、生活空間は居住区の「共同性」すら必要とせず、ましてや「地域社会」再生の要件である自治的共同を本質的にもち得るはずがない。言い換えれば、現代社会のような資本という対抗軸もプロレタリアートのような階級イデオロギーも曖昧となり、代わって生命的生存基盤が財とサービスに依存して成り立つ時代とその時代を補完する社会システムや社会保障制度の拡充と充実、透明性が問題となる「環境」では、「相互にアソシエイトしあう」ことは現実的に困難である。なぜなら、現代を生きる人びとの多くは連帯よりも財とサービスの近代社会システムを生きることを選択し、そのシステムからこぼれ落ちないようにすることで精一杯の時代だからである。

4 〈両面的乗り越え論〉と近代社会システム

マッキンタイアは本報告の意味するところである〈両面的乗り越え論〉について、「私たちの時代の鍵となる知的対立とは自由主義的個人主義と何らかの形態のマルクス主義か新マルクス主義との間の対立なのだ」という。「マルクス主義のおかげで〈人間の自律〉という観念は、当初の個人主義的定式から救い出され、可能な形態の共同体への訴えという文脈のうちに取り戻すことができる。その共同体の中では、疎外が克服され、誤った意識が廃棄され、平等と兄弟愛(博愛)という価値が実現されることになる」という考え方が唱えられてきた。本報告ではマッキンタイアのこの指摘は現在の〈両面的乗り越え論〉に大なり小なり通じるものと解釈する。しかし、〈両面的乗り越え論〉では“近代そのもの”がもつ問題を解決することができない。

なぜなら、前述したように、「両面的乗り越え」はその両方、つまり「自立した個人」とその連帯で近代社会システムを補完しようとするものであり、コミュニティのような空間を維持管理・運営するための自治的共同における〈共同の動機〉が醸成される土壤をもたないからである。つまり、他者の存在を必要とせずに自分たちの生活基盤が成立していく過程が近代市民社会であり、この近代市民社会を補完するのは官僚制システムである。官僚制システムに依存しながらシステムを「自立した個人」が批判することは、結局、官僚制依存の渦中でシステムに対応する自発的な個人は生み出すが、システムを媒介としない自然と人間の関わり、地域資源を維持管理・運営するための自治的共同を担い合うのに不可欠な〈共同の動機〉にまで発展する理由が「自立した個人」の自由選択参加以外にない。

コミュニティ回復の際に検討されなければならないのは、地域という在所の空間をそこに関わる人びとで了解、共有するとための持続可能な関わりのあり方と〈人間の共同〉についてである。言い換えれば、土地の記憶に〈自治的共同性〉が付与されていること、そしてそのような歴史性を躍動させる関わりのあり方の検討である。個人がシステムに依存することで成り立つ〈両

面的乗り越え論)は「地域社会」に根づく〈人間の共同〉を醸成することは難しく、またアソシエーションという形態は持続不可能なものである。

4 人間存在の把握の方法論の展開の必要性和〈持続可能な共同性〉

“近代そのもの”を問う必要は、〈共同の動機〉の契機とは何か、強いては「自立した個人」とは異なる人間存在の把握の方法を探求することである。それは同時にシステムに依存しなくなったとき、システムに代わる〈人間の共同〉を新たに創造することが現代の社会でできるかどうかという深刻な問題を包含する。近代社会は人間存在を空間、時間的な束縛から解放したが、そのためにシステムに依存する人間生活を生み出してきた。そこに孕む「環境」の問題の根深さが現代社会にある。

→その克服のための真の自立・自治とは何か

→「地域社会」の回復と求められる地域を維持管理・運営するための共同原理とは何か

→〈持続可能な共同性〉とそれを担い得る人間存在を把握するための方法論の必要性

) 〈持続可能な共同性〉とは？

〈持続可能性〉 + 〈共同性〉 = 〈持続可能な共同性〉

→両者はそれぞれが別個に重要性を指摘されるが、人間と人間の関わりのあり方において〈共同性〉が〈共同性〉として維持されていくには、そこに持続性が担保されていないなければならない。なぜなら持続性がなければ〈共同の動機〉は醸成されず、その意味で関わり合いの内実に脆弱性を抱えることになるからである

⇔アソシエーションに基づく協同や協働、共働とはその点で関わりの原理が異なる

) 〈共同性〉に〈持続可能性〉が担保されるとはどういうことか？

一般の「共同性」の議論との相違点

〈持続可能な共同性〉においては〈共同の動機〉をいかにして確保し、当事者間で円満・円滑に持続させていくかが論点となる。そのために〈共同性〉の原理は各人の自由選択参加に任されるだけでなく、〈参加のインボランタリー性〉のように他者との関わりのなかで醸成される原理を必要とし、そのことを共通認識として了解・共有するためには倫理や規範が重要となる。つまり、〈人間の共同〉における持続可能性とは倫理や規範をいかに醸成するのかを同時に問うており、それが〈共同の動機〉とは何かという論点を生む。

またこの〈持続可能な共同性〉を担い得る人間存在は〈参加のインボランタリー性〉を担い得る存在でなくてはならず、それにはこれまでの「自立した個人」とは異なる方

法論で人間存在を把握することが求められる。本報告は人間存在の把握の方法について様々な方法が必要であり、特に「地域社会」のようにインフォーマルな人間と人間の関わりのある方、〈自治的共同性〉を内包している場所における人間存在のあり方は、近代的個人概念に依らない人間存在の把握の方法論を採用しなければ捉えることが難しい。現代日本のように「地域社会」やコミュニティの再生がこれだけ取り沙汰されていることを踏まえれば、倫理思想においても「地域社会」を担い得る人間とは何か、という観点から人間存在の把握の方法それ自体を新たに展開していくことが望まれる。言い換えれば、〈自治的共同性〉を担える人間存在の把握の方法論を探求することが、人間存在の倫理とは何かを現わすことになり、本報告ではそれを〈持続可能な共同性〉に求めた。

【参考文献】

- アラスデア・マッキンタイア『美徳なき時代』篠崎栄訳、みすず書房、1993
- 竹井隆人『集合住宅と日本人』平凡社、2007
- 田畑稔『マルクスとアソシエーション』新泉社、1994
- 広井良典『定常型社会——新しい「豊かさ」の構想』岩波書店、2001
- 広井良典『持続可能な福祉社会——「もうひとつの日本」の構想』筑摩書房、2006
- 広井良典『コミュニティを問いなおす——つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房、2009
- 増田敬祐「ペルソナ的人格モデルにみる人間存在の在り方」農林統計出版 / 共生社会システム学会(編)『共生社会システム研究』Vol. 3, No. 1、農林統計出版、2009
- 増田敬祐「地域と市民社会」唯物論研究協会(編)『唯物論研究年誌 第16号 市場原理の呪縛を解く』大月書店、2011
- 元田厚生『個人主義と共同体主義の両面的乗り越え』梓出版、2007